がまぬま【蒲沼(がまぬま)】

***がまぬま**　蒲沼は蒲の多く生じたる沼地にありを以って名とせしと云う。

大正2年6月編纂 一日市村郷土誌

がまぬま

「天正年中、南部よりの落ち武者、五十目で自刃す(十三騎社)。その遺臣、三戸甚辺衛、蒲沼に住す」とある。

大正14年 一日市町振興会

かばぬま〈八郎潟町〉

「がまぬま」「がまのま」ともいう。馬場目川が八郎潟に注ぐ地点の東北方低湿地に位置する。北は夜叉袋。南は一日市に接する。地区内から土師器片が出土。

〔中世〕蒲沼町　戦国期に見える村名。出羽国秋田郡のうち。天正19年正月17日豊臣秀吉が秋田実季の当知行を安堵した朱印状写に「か満のま村・にい堀村」236石余とある。「慶長6年秋田家分限帳」にも、「湖東通蒲沼村」236石余が栗沢弥五郎の代官所支配の村として指定（秋田家文書）。湖東通りの村と注記されているので、当時小鹿島(おが)内として扱われた天王砂丘上の蒲沼村のことではない。村の東端部に、天正～慶長年間頃、沼地と中島を利用した押切城が整備。

〔近世〕蒲沼村。江戸期の村名。秋田郡のうち。秋田藩領。中世末期の新堀村を含み、近世村落を編成。

藩政初期に秋田旧臣中川宮内、次いで藩重臣戸村十太夫が当村を含む潟東12村開発の指紙を獲得し、戸村堰用水を完成させ、新田開発に着手。寛永5年11月23日真崎李富がが沼村を含む6か村野谷地新開の指紙を得て、開田事業を継承（真崎氏家譜・東山文庫文書）。

「正保国絵図」「元禄7郡絵図」ともに300石と図示するが、実際は押切村分も合算しているらい。天和4年「黒印高帳」では、村高258石余・当高236石余（うち本田162・新田74）と認定。宝永2年「黒印高帳」では村高261石余・当高238石余。享保年間の郡村改めで一日市村に包摂され、その枝郷となる。羽州街道の整備により、寛文2年一日市村が宿駅場に指定される。以後、寛文10年頃までに当村の人家は宿駅場付近に移住を完了したと伝えらる。

上記の天和・宝永の「黒印高帳」は、田畑だけの村高ということになる。慶安元年「検地帳札扣(ひかえ)」には蒲沼村の戸数20軒とある（明和7年記録／畠山家文書）。

村鎮守八幡神社は寛文2年焼失。境内址に貞和5年銘板碑があり、須恵器片も出土（町史）。別当を兼帯した修験明楽院（畠山氏）も一日市村に移転。現在は小字の蒲沼として地名をとどめる。

1980.3出版　角川日本地名大辞典　5　秋田県

旧蒲沼村跡

一日市集落西はずれ、広い田畑のなかに旧蒲沼村跡地の標柱が立っています

菅江真澄も歩いた歴史の道「羽州街道」”から

NTT東日本秋田支社

かみ【川崎嘉美(かみ)】

調査中

かわぐち【川口(かわぐち)】

調査中

かわさき【川崎(かわさき)】【五城目町川崎】

かわさき〈五城目町・八郎潟町〉

馬場目川の下流右岸平野部に位置する。

〔中世〕川崎村。戦国期から見える村名。出羽国秋田郡のうち。天正19年1月17日豊臣秀吉が秋田実李の当知行地を安堵した朱印状写に、「川崎村・八幡林村」272石余とある。「慶長6年秋田家分限帳」にも栗沢弥五郎の代官所支配の村として